天皇陛下病状思わしくなく中止

富永神社祭礼奉納

能組

とき　昭和六十三年十月七日(金)
午後三時半始
ところ　富永神社能楽殿

能

仕舞

老松　川村実由起
小督　荒井万友美
絃上　大岩邦江
葛城　伊藤万里子

狂言　口真似　伊藤佐智子　原千香子　水野美麻子

能　花月（シテ）今泉英三（ワキ）今泉利夫　間　小田治　大鼓　清水利高　小鼓　福井啓次郎　笛　鹿取希世

仕舞

老松　荒井裕子
船弁慶　広部亜紀
俊成忠度　夏目茂斉
蟬丸　榊原香奈子

狂言　樋の酒　天野泰広　加藤将二　山口恒生

居囃子　羽衣　大鼓　清水利高　小鼓　永田六兵衛　大鼓　鈴木崇史　笛　今泉英三

仕舞

紅葉狩　花井洋之
月宮殿　松井雅俊
羽衣　花井延昌

狂言　梟山伏　酒井宏　権田重紘　水谷利夫

能

井筒

シテ 太田康弘

ワキ 鈴木肇

大鼓 河村総一郎

小鼓 永田六兵衛

笛 今泉英三

間 佐藤友彦

狂言 棒縛

安形忠久

加藤賢一

小林常男

独調 烏頭

長田驍

今岡アイ子

仕舞 七騎落

大杉かすみ

仕舞 湯谷

本田三郎

大江山

鈴木克幸

居囃子 鞍馬天狗

大鼓 清水利高

小鼓 森田収

太鼓 中嶋康夫

笛 太田康弘

仕舞 六浦

今泉利夫

実盛

鈴木肇

狂言 六地蔵

佐野元之助

松井平

中山伸一

水谷至男

西田好夫

能

黒塚

シテ 長田驍

ワキ 安藤武

ワキツレ 鈴木洋市

大鼓 鈴木正治

小鼓 森田収

太鼓 水谷清

笛 太田康弘

間 原田三郎

附祝言

（終了予定 十時頃）

主催 新城能楽社中

本町区

あらすじ

狂言

口真似（くちまね）

知人から酒、肴を貰った主、程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは、評判の酒乱の男。一計を案じた主人は太郎冠者に、自分の言うように真似をせよと命じます。

能

花月

七つになる可愛い我が子を天狗にとられた父親が出家の身となり故郷を出てその行方をたずねながら諸国を行脚すること数年、京都の清水寺に着きます。都は春の花ざかり、小歌をうたいながら俳徊する花月という遊芸者が花に誘われてあらわれ参詣人の所望に応じていろいろな芸を披露して居ります。

僧も群衆にまじって花月の遊芸に興じていますがこの少年の面ざしをよく見れば紫紫で行方不明となった我が子に似ております。そこで花月の生い立ちをたずねますと天狗にさらわれた身の上を語りますので、まさしくわが子とわかり互に各乗り合って親子久々の対面をよろこび、花月は遊狂の生活とも別れを告げ、父と、もに仏道修業の旅に出ます。

シテのかける面は喝食（かっしき）と云い、昔は禅家の食堂（じきどう）に仕えたものを喝食といいましたが後は半僧半俗の遊芸者をよぶようになりました。

狂言

樋（ひ）の酒（さけ）

留守の度に盗み酒をする冠者二人、今日は二人を米蔵、酒蔵に分けて留守を申付け主人は外出します。やがて二人は両方の蔵の窓に樋をかけ渡し、酒をそそき飲む……

狂言

梟山伏（ふくろう）

山仕事から帰った弟の容態がおかしいので、心配した兄は知り合いの山伏に祈って治療してもらおうとするが、山伏が祈ると弟は奇声を発する……尊大に構えて登場したした山伏もやがて……

能

井筒

旅僧が在原寺のそばを通りかかり、この寺がその昔在原業平と紀有常の娘の夫婦が住んでいた石上の旧蹟であることを思い出し苔むした古塚の前にたゝずんで居りますと折から若い女が塚に花木を手向けに来たのを見て声をかけると当寺の開基業平のこと、その妻の紀有常の女のことを語ります。

古塚のそばにある板井のまわりで遊んだ幼い男女が成長し、男は「筒井筒」の歌を、女は「くらべこし」の歌を贈り合い夫婦になります。伊勢物語りによれば夫が夜毎に恋人のところへ忍んでゆくのを妻は恨むどころか通い路の無事を祈って竜田山の歌を詠んだので、夫はその心根をいじらしく思い、再び仲睦じくなったとあります。それで紀有常の娘を筒井筒の女のとも、人待つ女とも言ふのだと詳しく物語るので僧はおおよそのことを察しますが果して女は有常の娘の亡霊であることを明かし井筒のかげに消えます。

やがて秋の夜も更けた頃、女が僧の夢枕に立ち業平の面影恋しさの余り昔男（業平）の姿を真似て衣冠束帯をつけて昔をなつかしむように舞を舞いますが、その女の幽霊は幻となって消え失せ夜明けとともに目ざめた僧の眼の前にはただ破れ芭蕉の葉が風に鳴っているばかりでした。まことに秋にふさわしい静かな名曲でございます。

狂言

棒縛（ぼうしばり）

留守になると二人の冠者が酒を盗んで飲むのを知った主人は謀を用ひ両人の者をしばって外出します。残された二人は奇抜な工夫をめぐらして、又も飲みはじめます……

（歌舞伎の所作時にも作り替えられて特に有名になりました。）

狂言

六地蔵

ある田舎者が新築の堂に安置する六体の地蔵を求めに都へ上がって来る。大声で仏師を尋ね廻る田舎者に都の詐欺師が関わりをつげ自ら真仏師と名乗り明日の今頃までに作ってやろうと約束する。そして……

能

黒塚

那智の東光坊の阿闍梨祐慶は諸願成就のため全国を行脚していますが日数を重ね陸奥国安達ヶ原へ辿り着きます。日も暮れましたので今宵の泊りをどうしたらよいものかと案じていますと火の光がみえるのでその家に立寄り宿を乞います。家には女主人がただ一人住んで家の内があまりに見苦しいからといって宿を断りますが行くあてもない山伏を隣んで庵の扉をあけて招じ入れてくれます。

やがて女主人は夜寒を凌ぐため、裏山へ薪をとりに行きますがその留守に部屋をのぞくなといわれた禁を破って裕慶の従者が闇の中をのぞくと、おびただしい人の屍が積み重なり血が一面に流れまるで地獄の有様、さては鬼の住家であったかと肝をつぶし足にまかせて逃げてゆきます。さきほどの女は約束を破られた恨みに鬼女の本性をあらわし、食い殺そうと追ってきますが祐慶の必死の調伏に屈して次第に魔力も弱り夜嵐にまぎれて消え失せてしまいました。

前場はむしろ秋の夜の物わびしさ、人の世のはかなさを表現することに重点を置かれ、後場はおそろしい鬼女と山伏とのたたかい、「動」に転換されこの対比の面白さこそが本曲の醍醐味というべきです。

能装束・能面展示会

とき　十月八日（土）午前十一時より三時まで

ところ　新城文化会館和室